

2021年10月3日（日）「ほかの福音」

ガラテヤ 1:6-10

6 キリストの恵みへと招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に移って行こうとしていることに、私は驚いています。7 ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人たちがあなたがたをかき乱し、キリストの福音をゆがめようとしているだけなのです。8 しかし、私たちであれ、天使であれ、私たちがあなたがたに告げ知らせた福音に反することを告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。誰であれ、あなたがたが受け取った福音に反することをあなたがたに告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。10 今私は人に取り入ろうとしているのでしょうか、それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし、今なお人の歓心を買おうとしているなら、私はキリストの僕ではありません。

【序論】

私たちが信じているキリスト教の重要な特徴の一つに、教えの純粋性を徹底して保とうとする面があります。この点において、時に排他的だと言われることもあります。真理を曲げてしまったらそれはもはや真理ではなくなるわけですから、致し方ないところではあります。純粋な福音の周辺には常に「異端」が生えてくる傾向があります。共通項があっても内実が違っていたり、外見はそっくりでも似て非なるものであったり。そういうことがしばしば起こり、キリスト教は常に異端と戦ってきました。異端が生じると、信者が信仰から離れてしまったり、群が分裂して教会そのものが存続し得なくなるとか、共同体は痛手を負います。しかし、そのような経験を通して「まことの福音とは何か」が繰り返し問われ続けてきているとも言えるでしょう。その度に宗教改革が行なわれ、真理が取り戻されてきました。最近でも、日本福音同盟から異端に対する注意喚起の連絡が度々入ります。同じ「イエス・キリスト」の御名を掲げる「教会」でも、私たちが信じているところとは異なる内容が教えられていることがあるのです。この問題は初代キリスト教会においても早々に生じてきていました。現在学んでいるガラテヤ書は、まさしく異端の問題を扱っていると言えるでしょう。しかも、本書の問題の難しいところは、キリスト教がユダヤ教の歴史の流れの中で生み出されたという文脈上にあり、「ユダヤ教への回帰主義」との戦いであったからです。要するに、大元の方が正しいのではないかという考え方です。

【本論】

本論 1. 「恵み」プラス

キリストの恵みへと招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に移って行こうとしていることに、私は驚いています。(1:6)

手紙の冒頭の挨拶もそこそこに、パウロは直ちに叱責を始めます。通常は挨拶の後に相手方に関する感謝が述べられるのですが、それが無い。原文では6節の冒頭に「私は驚いている」(Θαυμάζω) という動詞が置かれていて、「あなたがたは一体どうしてしまったのだ」というパウロの驚き、衝撃が強調されています。パウロの理解によれば、ガラテヤ諸教会の信徒たちは「神」「キリスト」「恵み」から離れてしまったということです。この手紙が読まれた場所はすべて教会でしょう。他ならぬ教会に集っている人々がそのような状態に陥っていたというのです。このことにまず、読者は驚きを禁じ得ません。襟を正して聞く必要があります。ガラテヤ教会の人々が生ぬるい生き方をしていたということではないでしょう。真面目に信仰生活を送っている人々が、誤った方向にその熱心を傾けてしまったのです。

ガラテヤ教会を支配しつつあった思想とは、これまでもお伝えしてきたように、「ユダヤ主義的キリスト教」です。分かりやすく言うならば、人が救いにあずかるためにはキリストの恵みに依り頼む信仰だけでは不十分であり、それに加えて律法の要求に応じていかななくてはならないという考え。特に、選びの民ユダヤ人と同じように割礼を受けなくては(外的しるしを持っていないと)神との契約に入ったことにはならないと教えていたのです。このことを主張したのはユダヤ人の中からキリスト教に改宗した人々であったと思われます。彼らが長年守ってきたユダヤ教の伝統を、キリスト教会の中に持ち込んできたのです。

福音とは異なる思想を教会内に持ち込むということは、実は多くの形で起こりうることです。経済至上主義、独裁的政治体制、ヒューマニズムといったものが何らかの形で入り込む可能性があります。特に、ユダヤ主義というのはキリスト教と同じく旧約聖書を經典としているだけに、そこに記されている教えをどう解釈するかが、キリスト教との分かれ目となりました。パウロはここで断固としてユダヤ主義的「業による義」を却けています。それは、かつて誰一人として「行ない」によって神の御前に義とされた人はいなかったからです。救われるために割礼を受けることは、パウロにとって、罪人に対して注がれた無条件の神の恵みを無に帰する行為にほかならなかったのです。

さりげなく「キリストの恵みへ」と訳されていますが、前置詞「ἐν」の原意は「～の

中に」であり、神が御手を広げて招き入れてくださったことを表しています。「さあ、もう心配はいらないよ」「わたしが用意した救い、イエスの十字架の血潮という絶対的な罪の刑罰の代償によって、あなたがたは無条件に義とされたんだよ」という招きを受け、ガラテヤの信徒たちは喜んでそこに入って行ったのです。ところが、信仰生活を続ける中で、別の声が聞こえてきた。「君たち、それで救われたとでも思っているのか？」「割礼を受けていないじゃないか」「救いのしるしはどこにあるんだ？」。そのように問われ、不安になる人々が続出しました。「本当だ。私には救いを保証するものが何もない」「目に見えるしるしがほしい」「割礼があるユダヤ人が羨ましい」「彼らのようにならなくてはならない」。そのように考えが変わり、一人また一人と割礼を受け始めたようなのです。そのようにして、彼らは恵みに「業」を付け加え、知らずして神の愛の御手を振り払っていたのでした。

本論 2. ほかの福音

6節後半には「**ほかの福音に移って行こうとしている**」という表現が出てきます。「ほかの」(ἕτερον)とは「異質なもの」「似て非なるもの」を意味し、外見はあまり見分けがつかないけれど本質がまったく違うものであることを言い表しています。7節では直ちに補足説明がなされます。

ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人たちがあなたがたをかき乱し、キリストの福音をゆがめようとしているだけなのです。

福音は一つしかなく、それはキリストにおいて現れた神の一方的な恵みです。自分で自分の罪を処理することのできない罪人のために、神は無条件の赦しの道を拓いてくださった。それ以上もそれ以下もなく、人はこのことを信じる信仰によってのみ救われるのです。

しかし厄介なのは、割礼を受けるように勧めていたユダヤ主義者も自分たちの教えを「福音」と呼んでいたことです。パウロが皮肉を込めて「**ほかの福音**」と呼んでいるのはそのためでしょう。本来福音ではないものがあたかも福音であるかのように語られる。それは往々にして「より分かりやすいもの」「目に見えて確実であるもの」であることが多いのです。「信じるだけでよい」と教えるキリスト教が、かえって分かりにくいと言う人もいるかもしれません。修行や悟りを重視しする人にとって、キリスト教の教えは物足りないはずです。繁栄という結果が伴ってはじめて信じる意味があると主張する人にとっても、罪の赦しは取るに足りないものと映るでしょう。福音の本質を歪める可能性のあるものは、そこかしこに転がっています。その中から私たちは混じり気もない

宝石を見つけ出し、守り続けなくてはなりません。

6節に戻りますが、「**移って行く**」とは「党派や信条を変える行為」を意味し、それは究極「背教」につながります。「神の許を去る」「恵みを捨てる」と言い換えてもよいでしょう。7節の「**ゆがめようとする**」も同じくネガティブな表現ですが、「逆さまにする」「覆す」と訳すこともできます。神の恵みを無に帰するということです。

本論3. 呪われるべき

しかし、私たちであれ、天使であれ、私たちがあなたがたに告げ知らせた福音に反することを告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。(1:8-9)

ここでのパウロの宣告は恐るべきものです。かつて使徒たちがガラテヤ教会に告げ知らせた福音が歪められるなら、その原因をもたらした者は呪われよと言うのです。しかし、彼の言い方には細心の注意が払われています。「**私たちであれ、天使であれ**」と敢えて言うことで、「ユダヤ主義者」と直接名指しすることを避けているのです。誤った福音をもたらす可能性のある者はもしかしたら自分たちでもありうるということを暗に前提としているのでしょう。

「**天使**」が引き合いに出されるところに不思議な感じもしなくはありませんが、ここにはユダヤ教の天使論が背景にあるようです。ユダヤ教において「天」という表現が使われるとき、それは神の領域（神ご自身を表すことさえある）を指しますから、そこから遣わされる存在というのは至高のメッセンジャーだと言うことができるでしょう。しかし、パウロの知るところ、天使にも悪しき者が存在するのであって、人を惑わす働きをしている者が確かにいることを述べているのでしょう。パウロは使徒として、自分には福音の真理を守るためには天使さえも呪うことのできる権限を神より託されていると言います。このところに、パウロの使徒権の重要性が語られているのですが、彼がこの手紙の冒頭で「**人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、この方を死者の中から復活させた父なる神とによって使徒とされたパウロ**」(1:1)と念入りな自己表現をしたところに、彼が確かにキリストご自身によって使徒として召され、福音の真理を預かった者であることが強調されています。本書はパウロの使徒職の証明の書とも言える。

私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。誰であれ、あなたがたが受け取った福音に反することをあなたがたに告げ知らせるなら、その者は呪われるべきです。(1:9)

ここでは8節とほぼ同じことが言われていますが、「呪われる」という言葉をもう少し具体的に申しますと、それは相手を神の審きに引き渡すことであり、教会の交わりから断絶を意味します。福音を曲げることの責任の重大さが語られている。

本論 4. パウロが喜ばせようとしているのは (10 節)

今私は人に取り入ろうとしているのでしょうか、それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人の歡心を買おうと努めているのでしょうか。もし、今なお人の歡心を買おうとしているなら、私はキリストの僕ではありません。(1:10)

ここで言われていることはやや分かりにくいですが、この言葉の背後にはパウロに対する人々の非難があると思われまます。パウロが「恵みのみ」の福音を宣べ伝えるところには、異邦人に対していい顔をして安易な道で救いに入れようとする策略があるという非難です。「取り入ろう」(πειθω) という言葉の原意は「説得する」であり、パウロが自分の味方をつくるためにあちこち巡って説得しているというイメージが込められています。

しかし、よく考えてみましょう。彼が宣べ伝えている事柄は、ユダヤ教のパラダイムを根底から覆すものであり、そのような働きの中心にいる者は必ず茨の道を辿ることになるのです。事実、パウロが福音のために受けた迫害は凄まじいものでした。

キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは数えきれず、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度、棒で打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜海上に漂ったこともありました。幾度も旅をし、川の難、盜賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽兄弟たちからの難に遭い、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このほかにもまだあるが、その上に、日々私に押し寄せる厄介事、すべての教会への心遣いがあります。(Ⅱコリント 11:23-28)

パウロは福音のために苦しむことをよしとし、人ではなく神を喜ばせることに終始していました。「歡心を買う」とは「喜ばせる」こと。もし彼が迫害を受けずに生きようとするならば、ユダヤ人が喜ぶように割礼を宣伝すればよかったです。しかし、彼は命をかけて新しい福音(恵みに生きる道)を宣べ伝えました。

【結論】

私たちの教会も、パウロが書き残した文書を通して、福音を学んでおります。もし福音でないものが語られ、福音を損なった働きがなされていたとするならば、悔い改めて原点に立ち返らなければなりません。それは、共同体のあり方はもちろん、個人の生活

においても吟味されなくてはならないところです。私たちが信じている福音、宣べ伝えている福音をもう一度見直してみようではありませんか。

- ・ 私は「恵み」による自由に生かされているだろうか。
- ・ 律法主義、あるいは罪に支配された生活に戻っていかうとしてはいないだろうか。
- ・ 福音に何かを混ぜ合わせてはいないだろうか。

生活の隅々から、福音の生長を妨げる要素を取り除いていきたいと思います。

【祈り】

ことばと行為において一貫しておられる天の父なる神様。人の言葉には「歪み」があり、福音のメッセージそのものさえも変容させてしまいかねません。主イエスの教え、主イエスの生き方という原点が、いつしか見えなくなってしまう。教会に属しているながら、道を見失うことがあります。私たちを常に原点へと導き、恵みに生き、恵みを宣べ伝える者とならせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の初めから終わりまで、すべての属性において変わる事なき、父なる神の愛、純粋なる福音の真理を、ご自身の教会に宣べ伝えさせ給う、主イエス・キリストの恵み、信者の生き方の隅々までも、恵みによる自由で満たし給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。